実用的な教師あり学習

- ニューラルネットワーク(?)
 - 深層学習への準備
- サポートベクトルマシン
- アンサンブル学習
 - 特にランダムフォレスト
- 回帰
 - 数値を予測する問題

6. 識別 - ニューラルネットワーク -

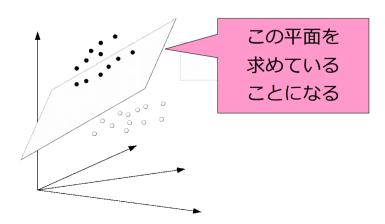
- 識別関数法
 - 確率の枠組みにはとらわれず、

$$f_{Positive}(\boldsymbol{x}) > f_{Negative}(\boldsymbol{x})$$

ならば **x** を Positive と判定する関数 *f* を推定する

- 単層パーセプトロン
 - 識別関数として1次式(=直線・平面)を仮定

$$f(\boldsymbol{x}) = w_0 + \boldsymbol{w} \cdot \boldsymbol{x}$$

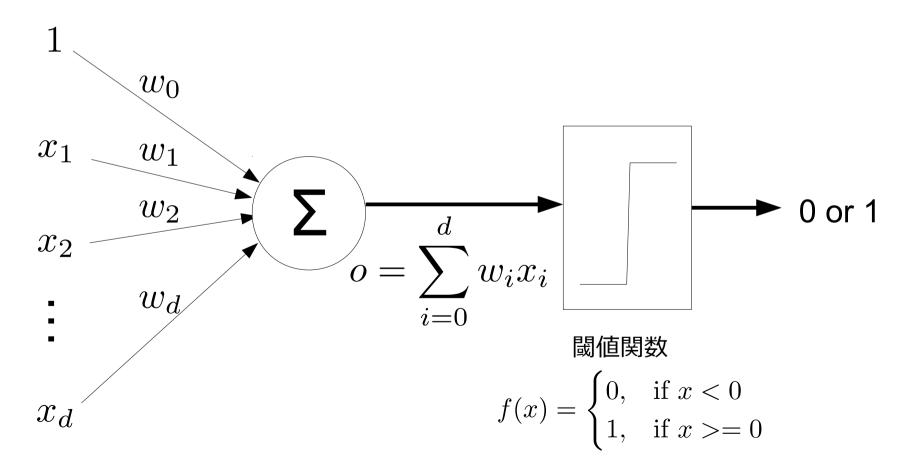


パーセプトロンの学習

• 単層パーセプトロンの定義

以後、wは w_0 を含む

• $w \cdot x = 0$ という特徴空間上の超平面を表現

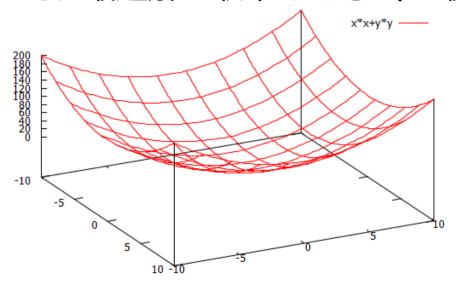


最急降下法

- エラーの定義
 - 二乗誤差 $E(\mathbf{w}) \equiv \frac{1}{2} \sum_{\mathbf{x}_i \in D} (y_i o_i)^2$

全データに対する 正解と関数の出力 との差の2乗和

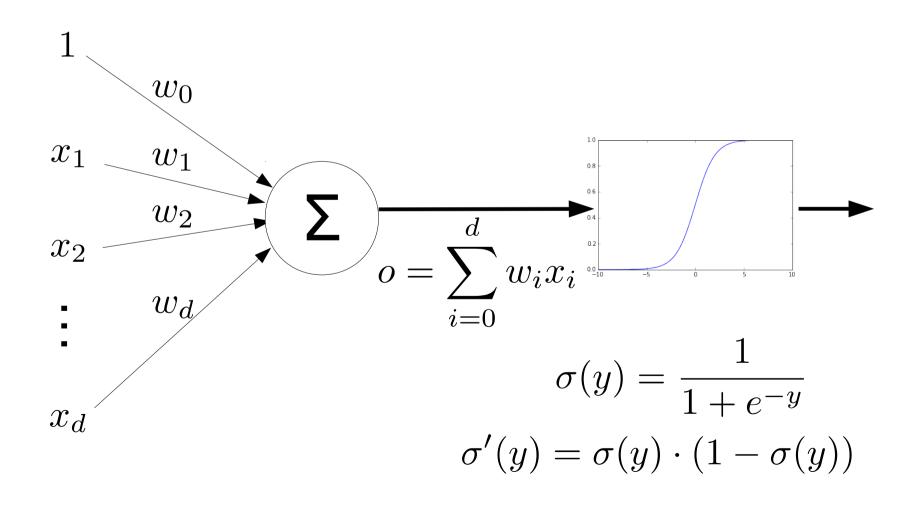
- Eはwの関数
 - wを E の勾配方向へ一定量だけ動かすことを繰り返して、最適解へ収束させる(→最急降下法)



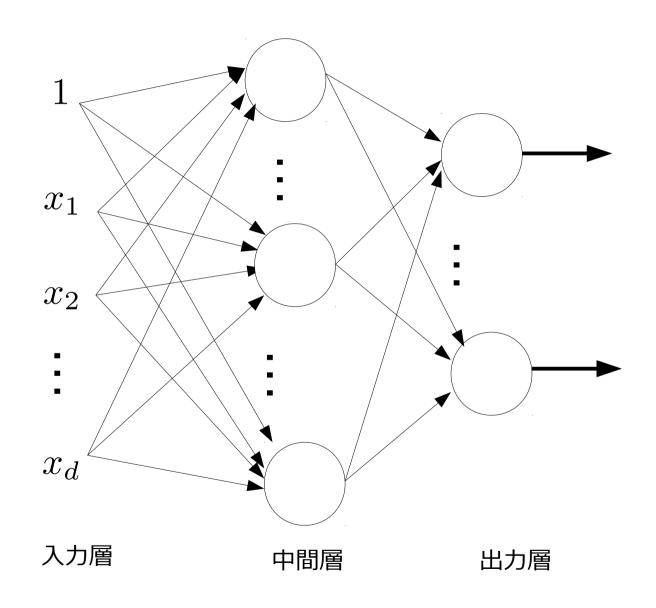
$$w_i \leftarrow w_i - \eta \frac{\partial E}{\partial w_i}$$

多層パーセプトロンへの拡張

- シグモイド関数の適用
 - 勾配計算の際に微分可能なものを用いる



多層パーセプトロンの構成



誤差逆伝播法による学習

- 1.リンクの重みを小さな初期値に設定
- 2.個々の学習データ (\mathbf{x}_i, t_i) に対して以下繰り返し
 - a)入力 \mathbf{x}_i に対するネットワークの出力 \mathbf{o}_i を計算
 - b)出力層の k 番目のユニットに対してエラー量 δ 計算

$$\delta_k \leftarrow o_k (1 - o_k)(t_k - o_k)$$

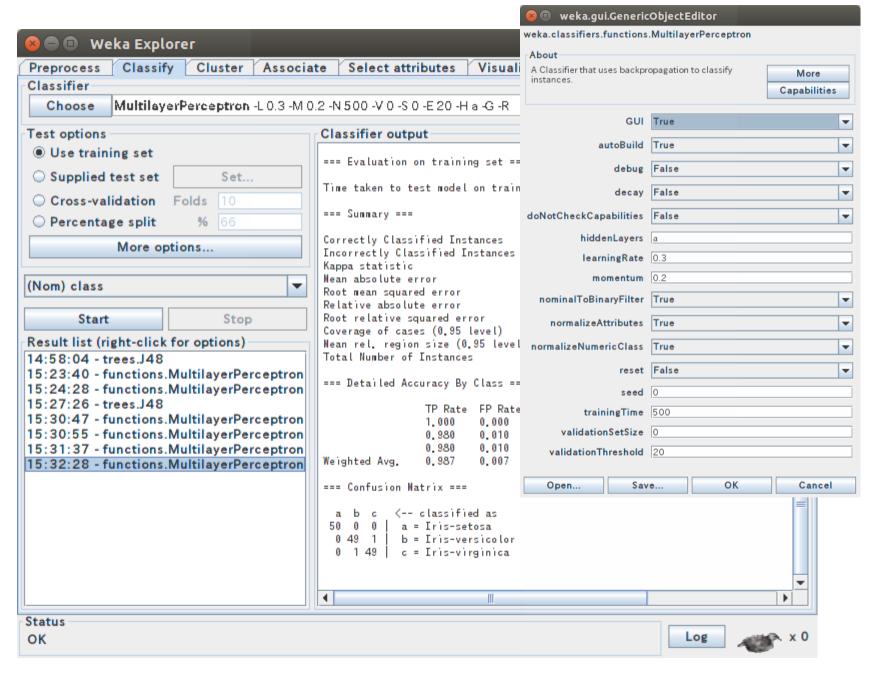
c)中間層の h 番目のユニットに対してエラー量 δ 計算

$$\delta_k \leftarrow o_k (1 - o_k) \sum_{k \in outputs} w_{kh} \delta_k$$

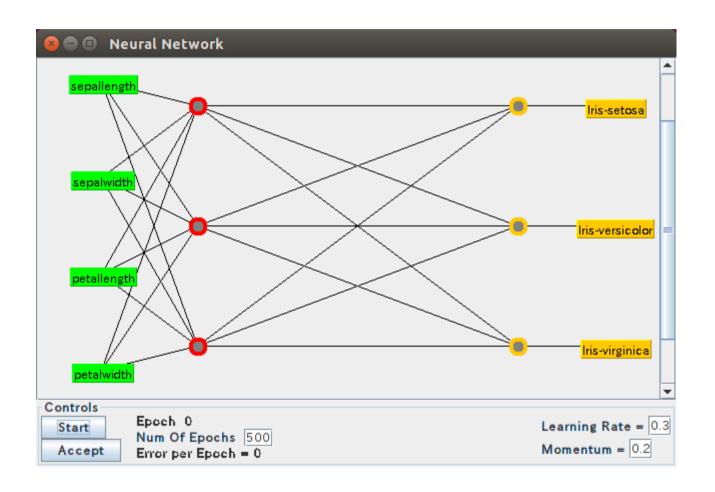
d)重みの更新

$$w_{ji} \leftarrow w_{ji} + \eta \delta_j x_{ji}$$

Weka の MultilayerPerseptron

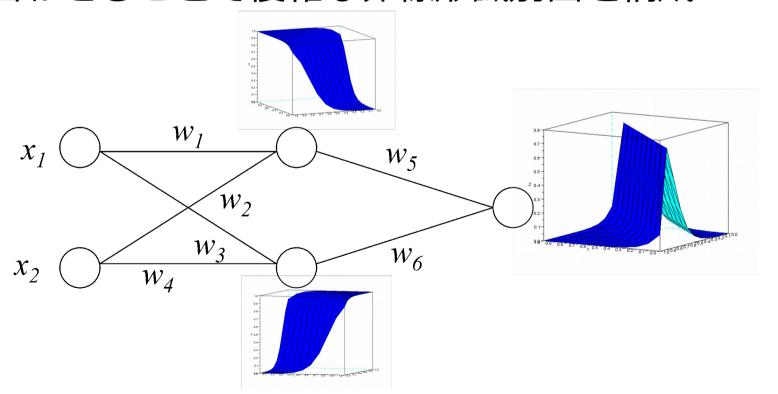


Weka の MultilayerPerseptron



多層パーセプトロンの特質

- 識別面の複雑さ
 - 中間層のニューロンの個数に関係する
 - シグモイド関数(非線形)を任意の重み・方向で足 し合わせることで複雑な非線形識別面を構成

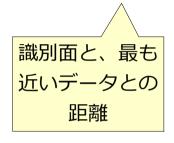


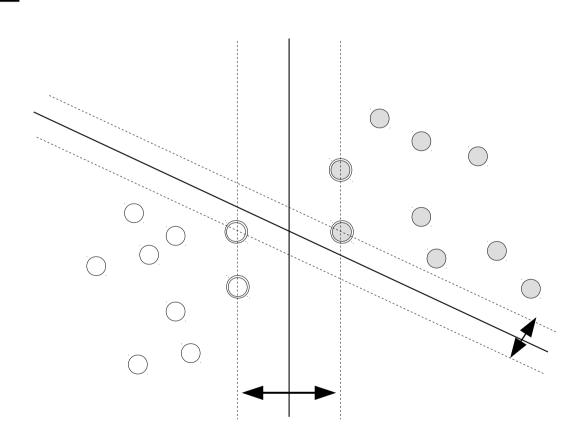
なぜニューラルネットが流行らなかったか

- 過学習
 - 学習データに適応しすぎて、未知データに弱い
- 局所的最適解
 - 初期パラメータを変えて何度も実験
- ハイパーパラメータがいくつかあるが、挙動が 理論的によくわからない
 - 中間層の数、モーメンタム ,etc.

7. 識別 - サポートベクトルマシン -

• マージンを最大化する識別面を求める





○ ○ : サポートベクトル

7.1 問題の定式化

• 学習データ

$$\{(\boldsymbol{x}_i, y_i)\}$$
 $i = 1, \dots, N, y_i = 1 \text{ or } -1$

・ 識別面の式

$$\boldsymbol{w} \cdot \boldsymbol{x}_i + w_0 = 0$$

・ 識別面の制約 (係数を定数倍しても平面は不変)

$$\min_{i=1,\dots,N} |\boldsymbol{w} \cdot \boldsymbol{x}_i + w_0| = 1$$

• 学習パターンと超平面との最小距離

点と直線の距離の公式
$$r = \frac{|ax + by + c|}{\sqrt{a^2 + b^2}}$$

$$\min_{i=1,...,N} Dist(\boldsymbol{x}_i) = \min_{i=1,...,N} \frac{|\boldsymbol{w} \cdot \boldsymbol{x}_i + w_0|}{||\boldsymbol{w}||} = \frac{1}{||\boldsymbol{w}||}$$

7.1 問題の定式化

- 目的関数: $\min \frac{1}{2}||\boldsymbol{w}||^2$
- 制約条件: $y_i(\boldsymbol{w} \cdot \boldsymbol{x}_i + w_0) \geq 1$ i = 1, ..., N
- 解法:ラグランジュの未定乗数法
 - 問題 $\min f(x) \quad s.t. \ g(x) = 0$
 - ラグランジュ関数 $L(x,\alpha) = f(x) + \alpha g(x)$
 - $-x, \alpha$ で偏微分して 0 になる値が極値

7.1 問題の定式化

計算

$$L(\boldsymbol{w}, w_0.\alpha) = \frac{1}{2} ||\boldsymbol{w}||^2 - \sum_{i=1}^{N} \alpha_i (y_i (\boldsymbol{w} \cdot \boldsymbol{x} + w_0) - 1)$$

$$\frac{\partial L}{\partial w_0} = 0 \quad \Rightarrow \sum_{i=1}^{N} \alpha_i y_i = 0$$

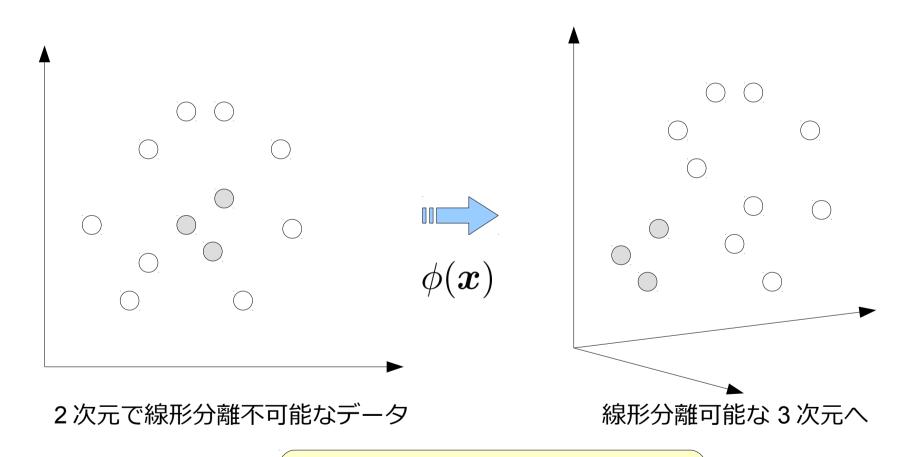
$$\frac{\partial L}{\partial \boldsymbol{w}} = 0 \quad \Rightarrow \boldsymbol{w} = \sum_{i=1}^{N} \alpha_i y_i \boldsymbol{x}_i$$

$$L(\alpha) = \frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^{N} \alpha_i \alpha_j y_i y_j \boldsymbol{x}_i \cdot \boldsymbol{x}_j - \sum_{i=1}^{N} \alpha_i$$

α についての2 次計画問題

7.2 カーネル関数の利用

特徴ベクトルの次元を増やす



ただし、元の空間でのデータ間の 距離関係は保持するように

7.2 カーネル関数の利用

- 非線形変換関数: $\phi(x)$
- カーネル関数
 - 元の空間での距離が変換後の空間の内積に対応

$$K(\boldsymbol{x}, \boldsymbol{x}') = \phi(\boldsymbol{x}) \cdot \phi(\boldsymbol{x}')$$

- カーネル関数の例
 - 多項式カーネル $K(x, x') = (x \cdot x' + 1)^p$
 - ガウシアンカーネル $K(\boldsymbol{x}, \boldsymbol{x}') = \exp -(\frac{||\boldsymbol{x} \boldsymbol{x}'||^2}{\sigma^2})$

この形であれば、対応する非線形変換が 存在することが数学的に保証されている

7.3 カーネル関数を用いた SVM

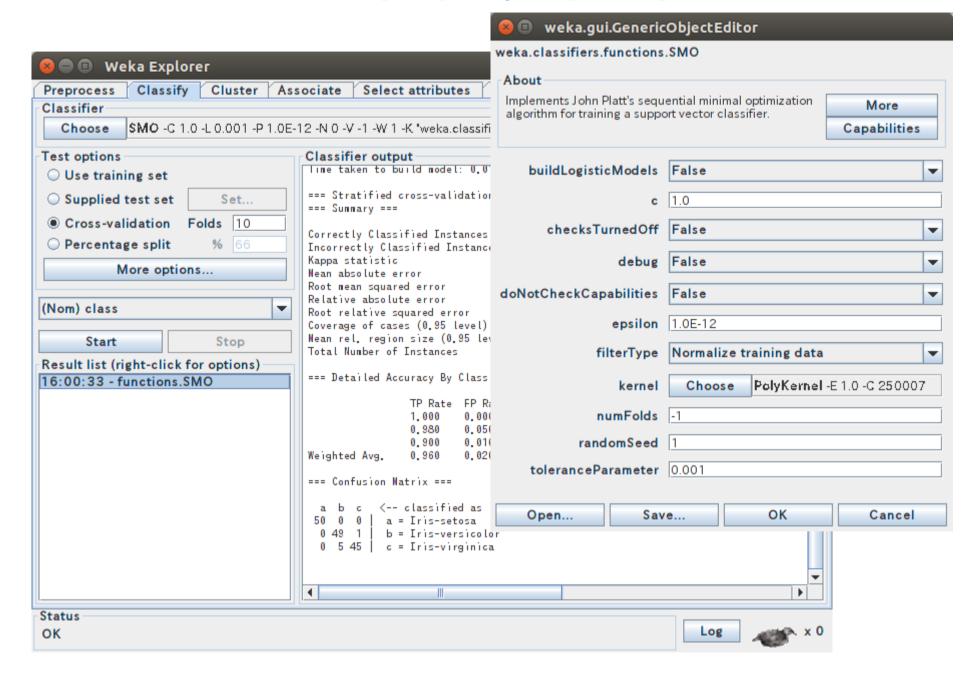
- 変換後の識別関数: $g(\mathbf{x}) = \mathbf{w} \cdot \phi(\mathbf{x}) + w_0$
- SVM で求めた wの値を代入

$$g(\boldsymbol{x}) = \sum_{i=1}^{N} \alpha_i y_i \phi(\boldsymbol{x}) \cdot \phi(\boldsymbol{x}_i) + w_0$$

$$= \sum_{i=1}^{N} \alpha_i y_i K(\boldsymbol{x}, \boldsymbol{x}_i) + w_0$$
非線形変換の
式は不要!!!

カーネルトリック

Weka の SMO



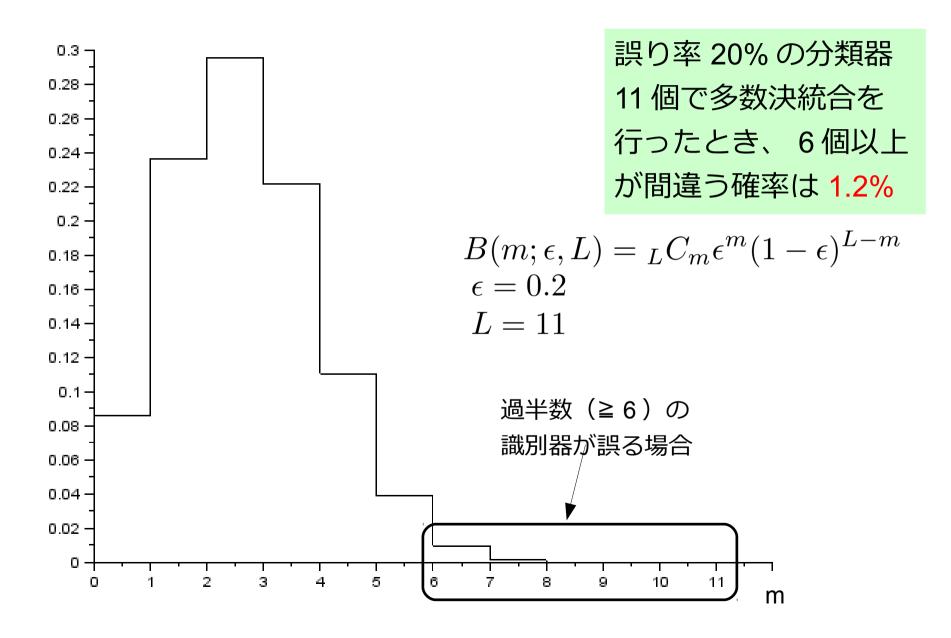
なぜ SVM が流行ったか

- 大局的最適解
- 高次元特徴量に強い
 - 文書分類などでは数万次元になることも
- カーネルトリック
 - ・文書・グラフ構造など、とにかくカーネル関数が定 義できればよい

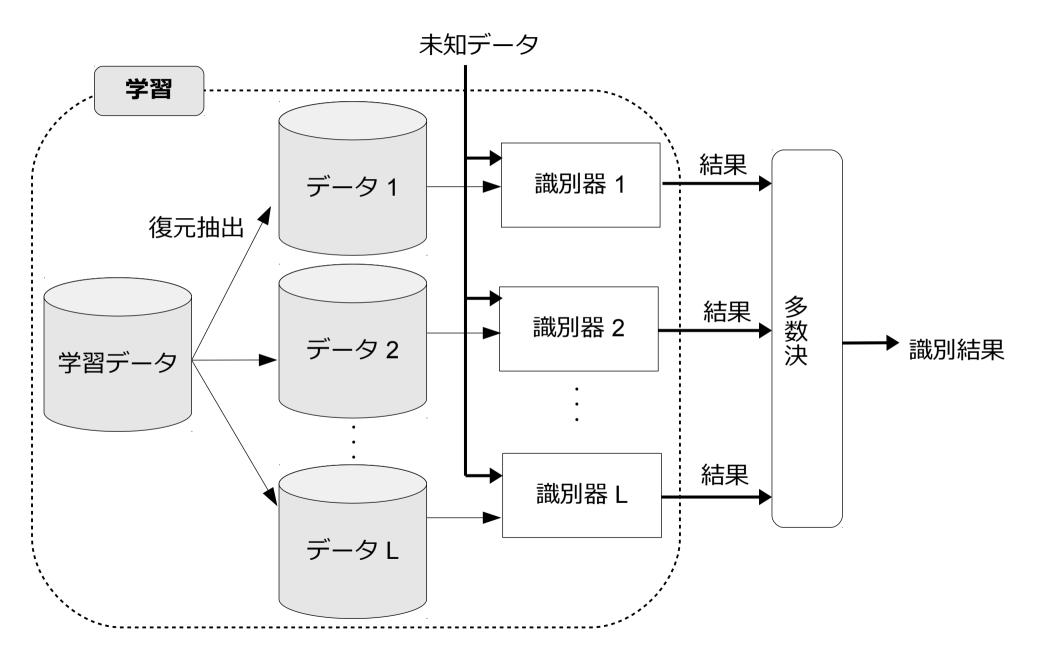
9. アンサンブル学習

- アンサンブル学習とは
 - 分類器を複数組み合わせ、それらの結果を統合する ことで個々の分類器よりも性能を向上させる方法
- アイディア
 - 訓練例集合から全く独立に L 個の分類器 (誤り率 ϵ , 誤りは独立)を作成
 - ightarrow m 個の分類器が誤る確率は二項分布 $B(m;\epsilon,L)$
 - $\rightarrow \epsilon < 0.5$ のとき、m > L/2 となる B は小さい値

9.1 なぜ性能が向上するのか



9.2 バギング



9.2 バギング

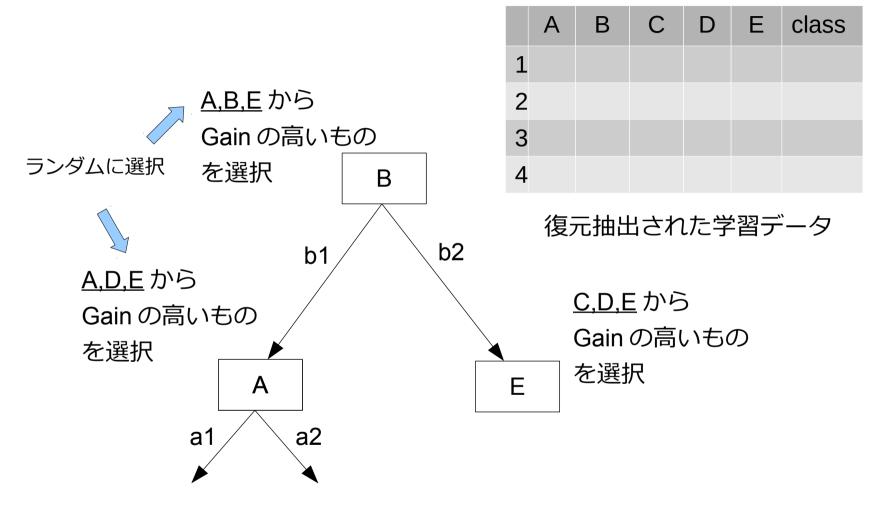
特徴

訓練例から復元抽出することで、元のデータと同じ サイズの独立なデータ集合を作成する。

n 回行って、あるデータが抽出されない確率 :
$$(1-\frac{1}{n})^n$$

- 各々のデータ対して同じアルゴリズムで分類器を作 成する
 - アルゴリズムは不安定(学習データの違いに敏感)な方がよい
 - 例)枝刈りをしない決定木
- 結果の統合は多数決

9.3 ランダムフォレスト

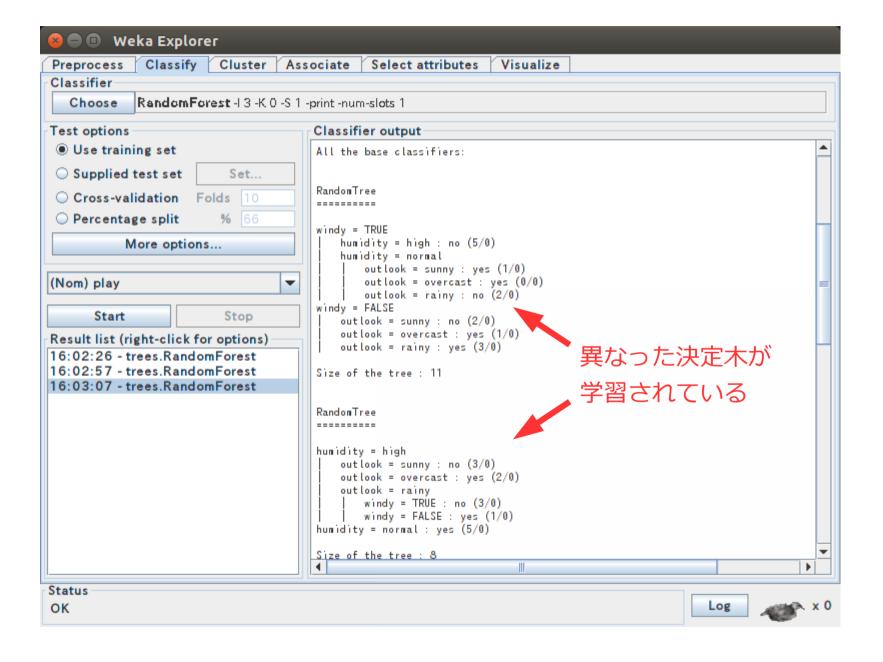


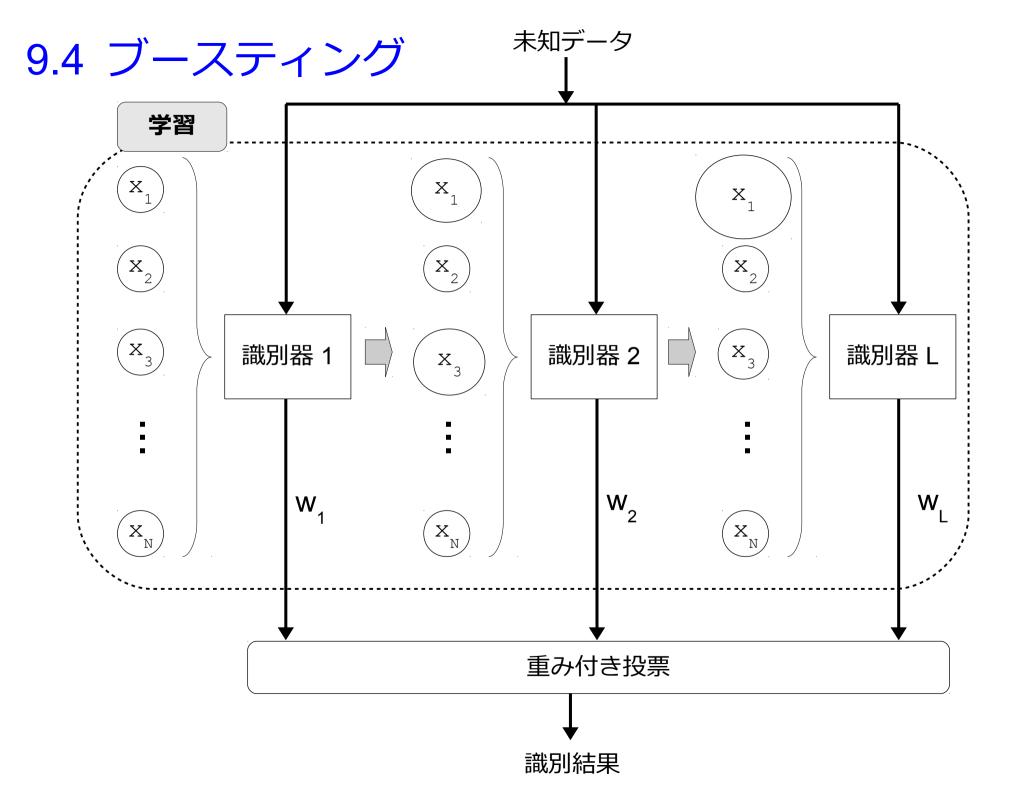
葉が単一クラスになるまで(過)学習

9.3 ランダムフォレスト

- 特徴
 - バギングと同様、学習データは復元抽出
 - ・識別器作成に使用できる特徴をランダムに制限する ことで、各抽出データ毎に全く異なった識別器がで きる
 - ・ 識別器は意図的に過学習させる

Weka の RandomForest





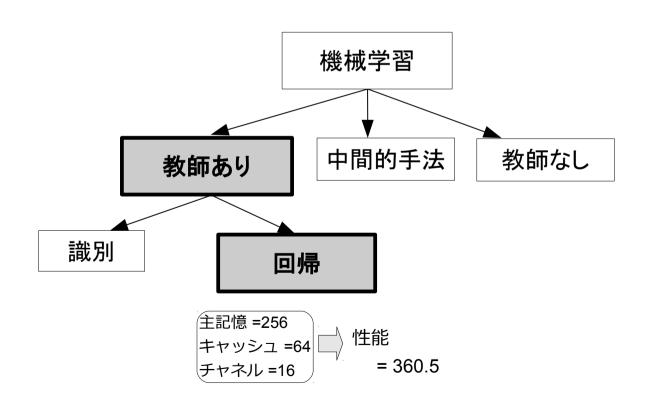
9.4 ブースティング

特徴

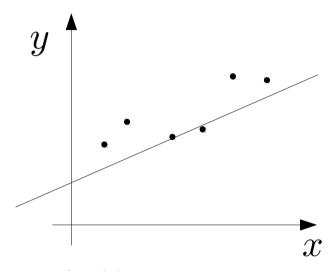
- 逐次的に相補的な分類器を作成
- 以前の分類器が誤った事例に重みを付けて次の分類 器を学習
- 学習アルゴリズムが重みに対応していない場合は、 重みに比例した数を復元抽出
- 結果は分類器に対する重み付き投票

8. 回帰

- 問題設定
 - 教師あり学習
 - 数值入力 → 数值出力



• 目標: なるべく誤差の少ない直線を求める



- 線形回帰の定義
 - 入力 x から出力 y を求める回帰式を 1 次式に限定
 - 学習データから係数 w を求める

$$\hat{c}(\boldsymbol{x}) = \sum_{i=0}^{d} w_i x_i$$

- 最小二乗法による係数の推定
 - 推定の基準:誤差の二乗和 E を最小化

$$E(\boldsymbol{w}) = \sum_{i=1}^{N} (y_i - \hat{c}(\boldsymbol{x}_i))^2$$

 $oxed{oxed} = (oldsymbol{y} - oldsymbol{X} oldsymbol{w})^T (oldsymbol{y} - oldsymbol{X} oldsymbol{w})^T (oldsymbol{y} - oldsymbol{X} oldsymbol{w})$

w:係数のベクトル表現

• wで微分した値が 0 となるのは

$$\boldsymbol{X}^{T}(\boldsymbol{y} - \boldsymbol{X}\boldsymbol{w}) = 0$$
$$\Leftrightarrow \boldsymbol{w} = (\boldsymbol{X}^{T}\boldsymbol{X})^{-1}\boldsymbol{X}^{T}\boldsymbol{y}$$

w が解析的に 求まる

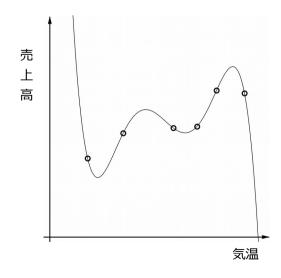
• 最小二乗法の精度向上

例
$$\phi(x) = (1, x, x^2, \dots, x^b)$$

• 基底関数 $\phi(x) = (\phi_1(x), \ldots, \phi_b(x))$ を考える

$$\hat{c}(\boldsymbol{x}) = \sum_{j=0}^{b} w_j \phi_j(\boldsymbol{x})$$

- 係数が線形であれば、最小二乗法が適用可能
- 問題点
 - 汎化性能の低下



- 正則化
 - 正則化項の導入
 - → 複雑なパラメータ w (過学習)の回避
 - L1 ノルム $|oldsymbol{w}|$: 0 となるパラメータが多くなる $oldsymbol{\mathsf{Lasso}}$
 - L2 ノルム $\|oldsymbol{w}\|^2$:パラメータを 0 に近づける Ridge
- リッジ回帰
 - 誤差の二乗和に L2 ノルム正則化項を加える

$$E(\boldsymbol{w}) = (\boldsymbol{y} - \boldsymbol{X}\boldsymbol{w})^T(\boldsymbol{y} - \boldsymbol{X}\boldsymbol{w}) + \underline{\lambda}\boldsymbol{w}^T\boldsymbol{w}$$

λ:誤差の二乗和と正則化項とのバランス

$$\boldsymbol{w} = (\boldsymbol{X}^T \boldsymbol{X} + \lambda \boldsymbol{I})^{-1} \boldsymbol{X}^T \boldsymbol{y}$$

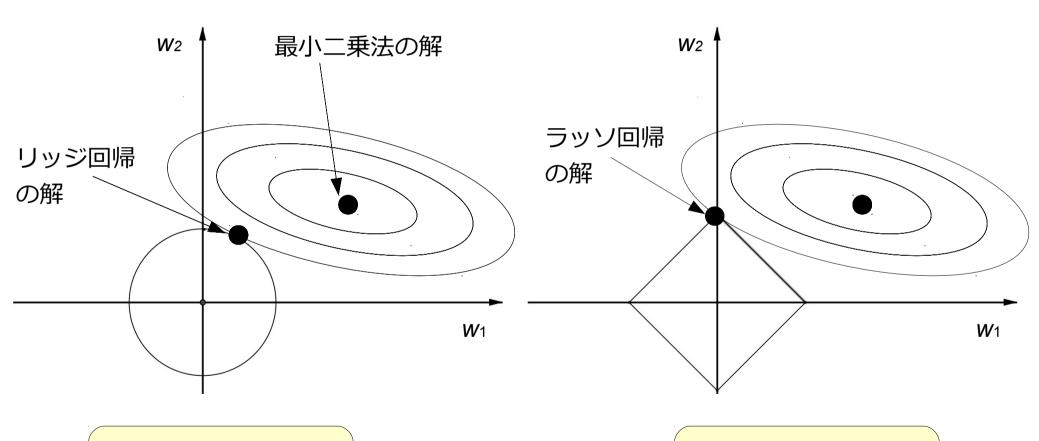
w が解析的に 求まる

- ラッソ回帰
 - 誤差の二乗和に L1 ノルム正則化項を加える

$$E(\boldsymbol{w}) = (\boldsymbol{y} - \boldsymbol{X}\boldsymbol{w})^T (\boldsymbol{y} - \boldsymbol{X}\boldsymbol{w}) + \lambda \sum_{j=1}^{a} |w_j|$$

- 一微分不可能な点があるため、解析的に解を求める ことができない
 - 適当な初期重みから始め、リッジ回帰で上界を押さえる逐次更新アルゴリズムを用いる

• リッジ回帰とラッソ回帰



パラメータを 0 に 近づけている 0 となるパラメータを 多くしている